

## 京都ワンディセミナー：利用者の立場から見た大学図書館

### 京都大学附属図書館における情報リテラシー教育

藤原由華

Information Literacy Programs at Kyoto University Library

Yuka FUJIWARA

#### はじめに

今日は、「京都大学附属図書館における情報リテラシー教育」の事例報告をさせていただきます。京都大学の図書館が関わっている情報リテラシー教育の事例としては、6年前に始まった「情報探索入門」という授業の試みが全国的な注目を浴び、さまざまな場で発表もされています<sup>1)</sup>が、今回は、その授業に限らず、現在、京都大学附属図書館で行っている情報リテラシーの全体像<sup>2)</sup>をアウトライン的にご紹介したいと思います。

#### 1. 京都大学と京都大学の図書館

前提として京都大学と京都大学の図書館について、ごく簡単にご紹介しておきます。

京都大学は、10学部15研究科12研究所21センター等を持つ総合大学です。学部学生は13,567名、大学院生は8,246名、職員は5,310名、うち教員は2,912名（2002年5月現在）で、この学生・院生・教員の合計約2万5千名が、図書館の主なサービス対象といえます。

京都大学の図書館組織は、附属図書館、附属図書館宇治分館、そして学部・研究所等の図書室など、合計50以上の図書館・室に分かれています。附属図書館は、各学部や研究所、事務局等と同様に一つの独立した部局ですが、各部局の図書館・室は、附属図書館にではなく、各学部や研究所等の下に所属しています。このような方式を「調整された分散方式」と呼んでいます。附属図書館では主に全学部を対象とする情報リテラシー教育に携わっていますが、それぞれ自館の利用者層を対象に独自に講習会等を実施している図書室もあります。以下でお話するのは、附属図書館（以下、当館）での事例であり、京都大学の図書館・図書室全体での話ではないことをあらかじめご了承ください。

当館での情報リテラシー教育関係業務は情報サービス課参考調査掛（掛長1、掛員（定員）2、非常勤1の計4名）が担当しております。

#### 2. 図書館主催のガイダンス

それでは、まずは図書館主催のガイダンスからご紹介します。ここで図書館主催のガイダンスというのは、こちらで企画し、内容を考えて、人を集めて行う形式のものとします。以下、

5つに分けてお話しします。

## 2-1 オリエンテーション

オリエンテーションとは、図書館を始めて使う人のための導入的な利用案内を指すことにします。当館では、4月の入学式の週に5回連続で「新入生歓迎オリエンテーション」を行います。新入生オリエンテーションは、大学によっては全体的なガイダンスに組み込まれ、新入生全員にたいして行うところもあるかと思いますが、当館の場合は完全な自由参加です。毎日昼休みに30分、月曜から金曜まで計5回、当館3階のAVホールで行います。パワーポイントを用いて、当館の施設案内、利用方法等の概要を説明します。例年、5日間で400人程度の参加者があり、今年度は5回で444名の参加がありました。この新入生オリエンテーションは、参考調査掛だけでなく、他の掛からも加わった6名程度のワーキンググループが主催します。

もう一つ行っているオリエンテーションが「留学生のための図書館ツアー」ですが、これは留学生課からの依頼により、行っているもので、受講者はあらかじめ決められています。毎年、「京都大学国際教育プログラム参加学生」30名ほどと、「日本語・日本文化研修留学生」20名ほどを対象に各1回ずつ行います。どちらも、まず30分ほどAVホールでパワーポイントを用いて当館の施設案内・利用説明をしたあと、15分ぐらいで簡単な館内ツアーをします。

## 2-2 定期講習会

当館では、現在、「OPAC基礎講座」、「Web of Science講座」、「雑誌記事索引講座」、「電子ジャーナル入門講座」の4種類の講習会を「定期講習会」として開催しています。これは、各回30分（Web of Science講座のみ40分）で、それぞれ月に3回程度行います。時間のあいた時にいつでも気軽に受講できるように、同じ内容で一年を通して開講しています。すべて実際に端末に触れながら行う実習形式のため、先着5名までとし、当館1階サイバースペースの端末を利用します。今年（平成15年）の4月～6月の参加者は4種類あわせてのべ60名でした。

この定期講習会は平成13年10月に試験的にOPAC基礎講座から始め、少しずつメニューを増やして、平成15年4月からはこの4種のメニューを用意しています。

## 2-3 データベース・電子ジャーナル等講習会

これは、新しいデータベースが入った場合、あるいは専門性の高いデータベース等の場合に、提供元から講師を招いて単発の講習会を開催するものです。AVホールでの講義形式で行います。どんな講習会を行うかは、年によって異なります。

例として平成14年度と平成15年度を挙げますと、14年度は10月に電子ジャーナル講習会、同じく10月にWeb of Science講習会を行い、15年度は6月にSciFinder Scholar講習会を行いました。今年の10月にも、また講師を招いたこのような形式の講習会を開催する予定です。

## 2-4 卒論・レポートを書く人のための文献収集講座

上記の「定期講習会」や「データベース・電子ジャーナル等講習会」は特定のデータベース

等の具体的な操作方法等を知らせるものですが、ほかにどんなツールがあるのか、どんなことができるのか知りたいという声が利用者からしばしば聞かれます。個々のデータベースに関する講習会だけでは不十分で、やはり文献収集の基本的な流れを押さえて、体系的理解を助けるような講座も必要です。そこで、数年前に当館で行っていて、後述の「情報探索入門」開始に伴い中断されていた「卒論・レポートを書く人のための文献収集講座」を今年度から再開することにしました。6月23日（月）から26日（木）の4日間連続で同じ内容を計6回行いました。場所は附属図書館3階AVホールで、1回40分とし、できるだけ参加しやすくするため、3つの時間帯（12：10-12：50、15：00-15：40、16：30-17：10）を設定しました。いったいどの時間帯が学生には来やすいのか予測がつかなかったのですが、特に多かった最終日をのぞいては、どの時間帯も比較的均等に来たとようです。主に卒論を書く3・4回生を対象に、パワーポイントを用いた講義形式で、具体的な検索方法等には踏み込まず、文献検索の流れと基本的なツール等の紹介に留めるようにしました。

参加者は合計210名で、傾向としては文学部や教育学部等の文系の学部生が多いようでした。また、この4日間の後、「聴きたかったのに行けなかった」という学生のために追加開催を、という依頼を教育学部図書室より受け、教育学部学生を対象に、7月10日（木）の昼休みに再度同じ内容で行いました。これには50名ほどの参加者がありました。

それでは、アンケートから受講生の声をご紹介します。

◇文献検索ではいつも悩んでいたのが、とても助かります。ありがとうございました。

（文3）

◇今までOPACのみに頼っていた自分に気付かされた。今後は他の方法も有効に利用したいです。（教育3）

◇こんなに調べる方法があるのか、と感嘆。本の世界がどこまでも広がっていくみたいで、もっと大学にいたくなかった。（教育3）

◇文献収集については授業ではほとんど説明してくれないので、今回教えていただいて良かったです。（理4）

◇これまで適当に自分のやり方で調べていたのですが、体系的に説明していただいたことで、これまでのやり方の穴が見つかってよかったです。（文4）

◇もっとこういう講座があることを広めるべきであると思う。もっと前に知っていればよかったのにと考えた。（農4）

◇学部図書館についてもこのような講習会があればよいと思います。（法M1）

## 2-5 ガイダンスの広報

ここで少し、広報について触れておきたいと思います。図書館でガイダンスを行う際、どのように広報するか、どのようにすれば多くの人に来てもらえるのか、ということは毎回頭を悩ませる問題です。そこで、今回の「卒論・レポートを書く人のための文献収集講座」のアンケートで、「この講習会を何で知りましたか？」という質問をしました。その結果を一例としてご紹介します。私たちが行った広報は、アンケートの選択肢のとおりです。

ポスター・チラシ（学部図書室・教務）	59
ポスター・チラシ（附属図書館内）	58
附属図書館ホームページ	10
LSN（毎月発行のリーフレット）	8
附属図書館メールマガジン	3
その他	27

※その他内訳 友人の誘い（11）、図書館員の勧め（10）、先生の勧め（4）、たまたま（2）

この結果をみると、ポスターやチラシがやはり最も効果的であるといえます。特に京都大学の場合、附属図書館内と同時に学部での掲示も欠かせません。「その他」は要するにいわゆる「クチコミ」で、これもそれなりに効果があるようです。

これはしかし、対象が学部学生だったからこそその結果で、これが院生や教員相手だと、また様相が異なってくると思われます。そのあたりは、後ほどのパネルディスカッションでのお話を期待しております。

### 3. 授業との連携

それでは次に、授業と連携した情報リテラシー教育についてご紹介します。

ここで二つお話しますが、この二つはまったく性格が違います。一つ目の「情報探索入門」は独立した、正規のカリキュラム科目です。それに比べて、二つ目の「個別対応講習会」は先生の側で、授業の1コマとして活用することもできる、といういわば出張講習会のようなものです。

#### 3-1 全学共通科目「情報探索入門」

この講義については、関わった職員や教官からすでに発表が何度かなされています<sup>1)</sup>ので、詳細はそちらに譲りまして、概要のみご説明します<sup>2)</sup>。

この講義は、平成10年、全学共通科目（原則、全学部の学生に向けて開講される科目）の1つとして開講され、現在まで継続しています。提供部局は附属図書館で、全学部の2-4回生向け、金曜5限、前期13コマ2単位の選択講義です。授業は6名の教官のリレー講義で、そのうち4名の講義は演習とセットになっています。全学の図書系職員15名が「演習補助者」として参加し、教官と協力して演習にあたります。毎年、70~80名ほどの学生が単位を取得しています。

#### 3-2 個別対応講習会

これは今年度から始めた試みで、ゼミや授業の1コマ、講座、学科、学部、有志等のグループ単位で申し込んでもらい、内容は希望に応じてカスタマイズするという形式の講習会です。今までに、法学部1回生の一クラスや、1回生向けポケットゼミ、農学部の研究室などから依頼を受けています。農学部は別として、残りは授業の1コマを使って教官の希望にあわせた内

容で行いました。この個別対応講習会は、今後、広報していけばもっとニーズはあるのではないかと考えています。

#### 4. 自学自習のためのツール

これは、上で述べてきたように「人を集めて何かする」のではなく、利用者が自ら学びたいときにいつでも学べるように、あらかじめ情報を提供するというものです。具体的にいえば、資料の利用方法等のパンフレットや、ホームページでのオンラインマニュアル等が該当するかと思います。

当館では、毎年『access.txt- 文献調査・利用ガイド』という冊子を作成し、附属図書館で資料や情報を探す手順を詳細に紹介しています。また、今までに利用者から寄せられた質問とその回答例も掲載しています。この冊子は館内で無料配布するほか、Webでも公開しています<sup>4)</sup>。

また、上記の「定期講習会」に使用するテキストもWebで公開しています。

#### 5. 今後の課題

それでは最後に、私見ながら今後の課題をいくつか挙げてみたいと思います。

まず、「定期講習会」として現在4種類を開講していますが、このメニューを増やして多様なニーズに応える必要があると思います。例えば、館内ツアー、新聞の検索、特定のデータベース検索など、テーマを絞った短時間の講習会を、いつでも思い立ったときに受けられるようにしたいと思っています。

また、たとえば学部学生向け、大学院生向け、留学生向け等、対象者を限定した、よりきめ細かな講習会もさらに必要でしょう。ただし、京都大学の図書館は、始めにも申し上げたように50以上の図書室があり、大学院生や教員に近いのはやはり部局の図書室です。部局図書室とくに連携、協力して、京都大学の図書館全体として情報リテラシー教育にどう取り組んでいくかは、今後も大きな課題となっていくと思われます。

また、大学全体が教育にも力を入れるようになってきた昨今、「情報探索入門」のような正規科目を維持していくことはもちろんですが、「個別対応講習会」等で教員ともっと連携していくことは大事と考えます。図書館が提供する資料とサービスをもっと授業に活かしてもらえよう積極的に働きかけ、図書館が教育に果たす役割を教員に認識してもらうのも必要ではないでしょうか。

さらに、学生が必要と思ったときにいつでも自分ひとりで情報リテラシーを身につけられるように、自学自習のツールを充実させることも必要不可欠です。『access.txt』も今年（平成15年度）で7年目を迎え、そろそろ大幅に内容を見直す必要が出てきました。データベースの使い方を1枚で解説したクイックレファレンスの作成、『access.txt』Web版の改訂や発展など、少しずつ充実させていきたいと思っています。

注

- 1 全学共通科目「情報探索入門」に関する参考文献  
川崎良孝編『大学生と「情報の活用」——情報探索入門 [増補版]』京都大学図書館情報学研究会、2001  
慈道佐代子「全学共通科目『情報探索入門』の試み——図書館の役割について——」『大学図書館研究』54、1998、p. 43-54.  
呑海沙織「京都大学全学共通科目『情報探索入門』——図書館員の情報リテラシー科目への参加」『大図研論文集』22、1999、p. 17-24.  
慈道佐代子「情報リテラシー教育への参画」『第17回大学図書館研究集会記録. 学術情報提供と次世代図書館サービス——大学図書館の今後の戦略——』第17回大学図書館研究集会運営委員会編、東京、2000、p. 104-108.  
金子周司「インターネットでの情報探索——京都大学全学共通科目の講義・演習での経験」『短期大学図書館研究』20、2000、p. 43-50.  
金子周司「WWWでの情報探索を目的とした京都大学全学共通科目での試み」『情報処理教育研究会講演論文集』2000、p. 637-640.  
(<http://www.pharm.pharm.kyoto-u.ac.jp/channel/pdf/2000%20tansaku.pdf> (2004.1.30 確認))  
後藤慶太「情報リテラシーと図書館——「情報探索入門」の試み」『薬学図書館』46(1)、2001、p. 13-17.  
片野孝保「情報リテラシー教育の実際 (京都大学附属図書館)」『名古屋大学「情報リテラシー教育に関する調査研究」研究会報告書』「初年次における情報リテラシー教育に関する調査研究」研究会 (名古屋大学附属図書館、名古屋大学情報メディア教育センター、名古屋大学共通教育委員会) 2001、p. 23-33.
- 2 参照URL <http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/lesson/index.html> (2004.1.30 確認)
- 3 参照URL <http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/lesson/zengaku.html> (2004.1.30 確認)
- 4 参照URL <http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/webaccess/ACCESS.html> (2004.1.30 確認)